インカ

―昔と今―

岩波写真文庫　197

インカ 197

岩波写真文庫 197 インカ —昔と今—

編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所
監修 泉 靖一
写真 泉 靖一

リーマ市ウィルソン街

スペイン人の征服者ピサロは、一五二六年南アメリカの太平洋岸に、彼の本国より巨大な都市と整然たる道路網をもったインカ帝国を発見した。その版図は東コルディレラ山系から太平洋岸にわたる帯状のアンデス定着農業地帯全体で、人口は約六百万人、当時のアメリカ大陸の四十%におよんだ。帝国の成立は十五世紀の初頭であるが、この地帯の文明の起源は紀元前二十五世紀までさかのぼれる。スペイン人の侵入によって古代文明のあるものは崩れ去った。四百年にわたってスペインの植民地支配と、少数の白人地主、鉱山主の支配が続き、この地帯（現在のボリビヤ、ペルー、エクワドル）の人口の半数以上をしめるインディオは常に奴隷か下級労働者であった。しかし二十世紀の後半において従来の秩序はゆらぎ、新しい時代の担い手としてインカの民が立ちあがろうとしている。旅行中の写真に天野芳太郎、田中利一両氏のものを加えて紹介する。

→P.15は一五ページ参照をあらわし、〈 〉は出土地を示す。

目　次

定価100円 1956年8月25日 第1刷発行 1958年6月20日 第3刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

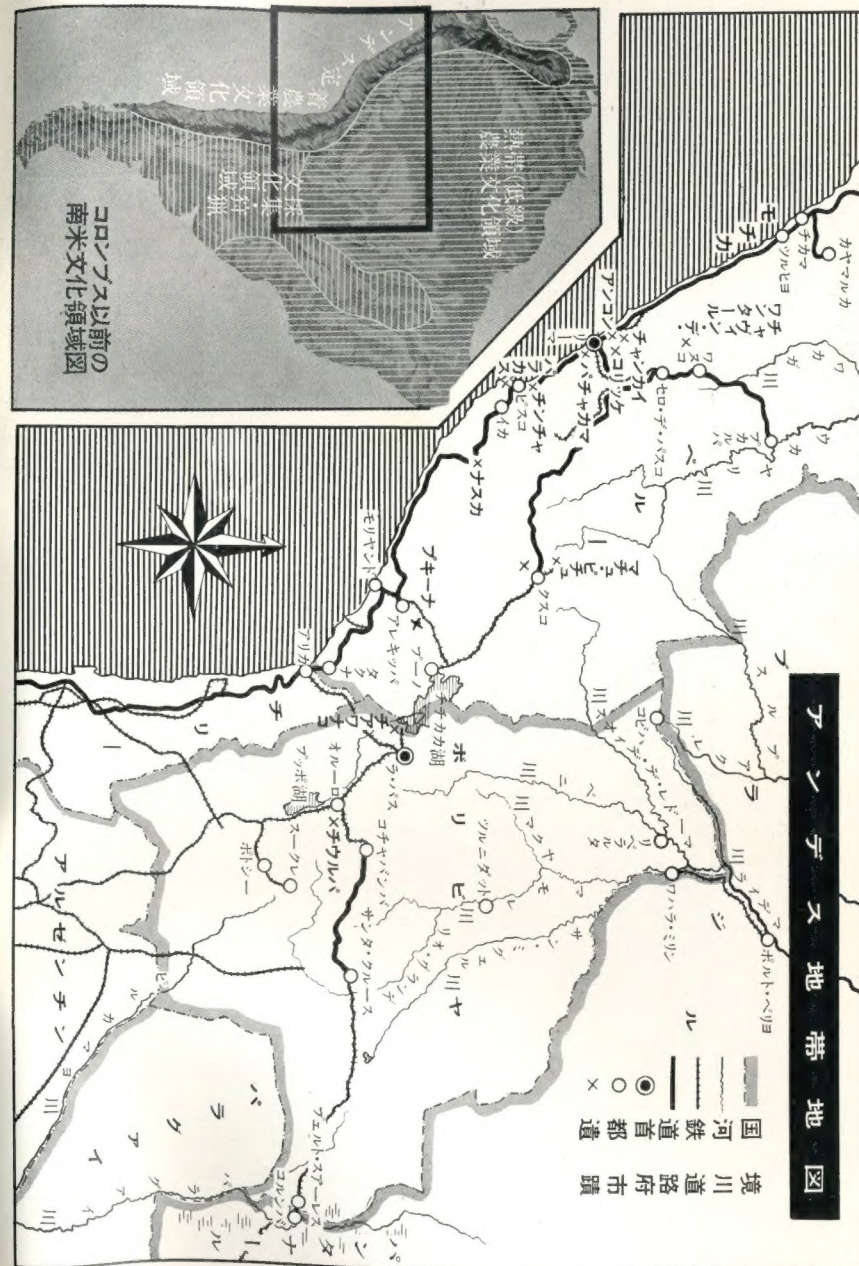
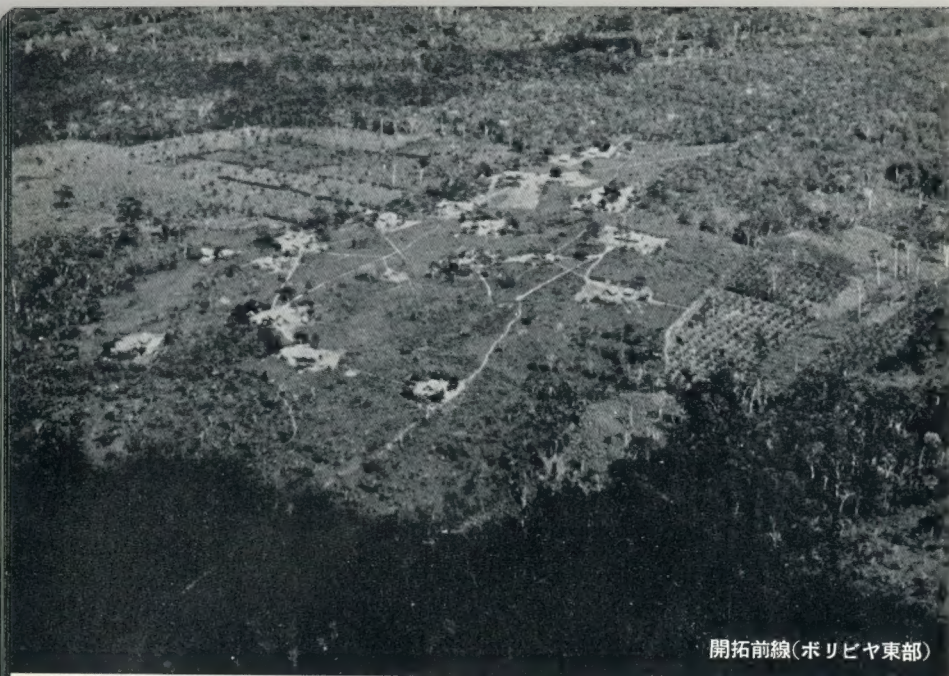
アンデス地帯地図

国境
河川
鉄道
首府
都市
遺跡

コロンブス以前の南米文化領域図

アンデス定着農業文化領域

熱帯(低級)農業文化領域

採集狩猟文化領域

開拓前線（ボリビヤ東部）

孤立した開拓地（ボリビヤ東部）

パンタナール

アンデス文明の東限　インカの支配はアンデス定着農業文化圏の外にはおよばなかった。現在のブラジル国マット・グロッソ州の西部は、長さ六百粁、幅三百粁におよぶ大沼沢地―パンタナールで、その西端にはパラグァイ河が流れている。この地帯には従来、大西洋、太平洋いずれの海岸からも陸路到達することは困難で、ラ・プラタ河をさかのぼるのが唯一のコースであった。従ってインカにとっては未知の地で、その後スペイン人が河岸にいくつかの小都市を建設したが、今日まで殆んど発展をみない。

パラグァイ川から、アンデス山脈の東端―東コルディレラ山系までの地帯は、海抜三百五十―四百米の大密林で現在もなお未開のインディオの住むパイオニヤー地帯である。

パラグァイ河畔，コルンバ市

亜アルチプラノ地帯

標高 4,000 米の農地

モンターニヤ　東コルディレラ山系の東斜面をモンターニヤと呼ぶ。海抜四百米から四千五百米におよぶ急な傾斜面で、自然も人間も変ぼうする。熱帯の樹木はかき消え、温帯林の山地には多数の住民と開墾された畑が現れて来る。この辺はすでにインカの土地で、長い人間の歴史が累積している。スペイン人は侵入後いちはやく土地を分割して支配した。

温帯地帯の上方は、谷間だけに樹木があって、平坦地は乾燥しきった亜アルチプラノ地帯である。灌漑が発達し、水溝の水を畑にひいて、集約的農業が営まれている。近年、オーストラリア原産のユーカリ樹の植林が成功したので、景観は一変した。両地帯とも、農村住民の九十%までがインディオーケチュア族で、支配者のスペイン人は都市に居住していた。

温帯の農村

アイル

チアワナコの石門 →p. 13

アルチプラノ　アンデス山脈の東端、東コルディレラ山系と、西端の西コルディレラ山系にはさまれた高原をアルチプラノ (altiplano) といい、高原の標高は三千七百―四千米で富士山より高い部分が多い。アルチプラノの人口は稠密で、いたるところに村落がみられ、アンデス文明のいくつかの中心が発見される。インカの始祖伝説もここが舞台となっている。

アルチプラノの農村も、多くの部分はスペイン人に分割されて、種々の経過をたどって大地主のアシェンダ(大農園)になり、住民はそのままピオン(農業労働者)となった。ごく一部は、アシェンダに分割されることなく、インカ時代のアイル共同体の組織をそのまま維持し、村落が土地を共有にしている。ボリビヤでは、一九五三年に農地改革が行われた。

モンターニヤからアルチプラノへの移行地帯

標高 4,500 米の耕地

農園，それは砂漠に続いている

アンデス西部の砂漠　湿度の高い貿易風が南半球では東南風のために，雨量はアンデス山脈の東部に多く，山脈の西側は全くの乾燥地帯である。海岸においてはフンボルト寒流のために，霧が七，八月に深くなる。何れにせよ，このような雨のない地帯が砂漠化するのは当然のことである。しかしアンデス山脈の氷河の雪解け水は小流となって海岸に流れて来る。このような小流を利用する灌漑技術は，アンデス文明の特徴であるばかりでなく，現在の学問的常識では全く関係のないものとされている，オリエント乾燥地帯のそれに似かよったものがある。また砂漠を流れて来る水量は稠密な人口にたいして充分なものではなく，従って海岸に興った諸部族，諸都市のあいだには絶えまなく水争いがくりかえされて，水源を断たれることは滅亡を意味した。現在ではこのような砂漠地帯の水は，大アシェンダによって支配されている。砂漠には広大な利用されていない土地は存在するが，水なくしては無価値である。水利権の分割が困難なために土地も分割されない。従って大土地所有の形態が，今日なお強い支柱によって支えられている。ここでは小農がなりたたない。

太平洋岸の砂丘，パッサマイヨ

大砂漠，背後に西コルディレラ山脈

緑の谷間，谷底の灌漑水のある所だけが緑である →p. 53

チャヴィン期(BC 700〜250) →p. 12

赤地白模様期(BC 250〜0)

生地模様期(AD 0〜250)

地方並存期(AD 250〜100) モチカ型

地方並存期(AD 250〜1000) ナスカ型

チアワナコ期(AD 1000〜1200) →p. 13

都市形成期(AD 1200〜1400) チャンカイ型→ p. 16

インカ期(AD 1400〜1532) →p. 14〜15

アンデス文化の編年

発掘された遺物に含まれる炭素一四の放射能を測定することにより、その年代を判定することが出来るようになったので、この時計の助けを借りて、アンデス文化史をつくりあげてみよう。

採集狩猟期　この地方に人類が住みはじめたのは紀元前七千五百年から五千年のあいだであって、農耕はしばらく行われなかった。

無土器農耕期　(BC 2500〜700) 定着的農耕を営み、村落が形成された。

チャヴィン期　(BC 700〜250) この期のはじまりに、トウモロコシが北方から伝播し、土器がつくられ、石造の大神殿が建造された。

赤地白模様期　(BC 250〜0) 土器は前期に比して、やや精巧になり、地方的に多くの変異をもちはじめた。

生地模様期　(AD 0〜250)前期から漸次変化し、土器に模様をぬり残す様式が一般的であった。

地方並存期(AD 250〜1000) 美しい彩色土器と布がつくられた。地方的特徴が強い。

チアワナコ期　(AD 1000〜1200) 特異なモチーフをもった彩色土器、石像、石造建築の複合文化で、アンデス一帯に広い分布をみた。

都市形成期　(AD 1200〜1400) 多数の巨大な都市がつくられたが、土器は黒白赤三色の簡単な色彩のものに移行した。

インカ期　(AD 1400〜1532) 前期においては地方的な部族集団であったインカがアンデス地帯を征服し、巨大な帝国を打ちたてた時期である。彩色尖底土器、巨大にして精巧な石造建築物、美しい布等、最も洗練されたアンデス文化がこの期に形成された。

花崗岩一枚石彫り〈チャヴィン・デ・ワンタール〉

花崗岩一枚石浮彫り棍棒をもっている →p.28
〈チャヴィン・デ・ワンタール〉

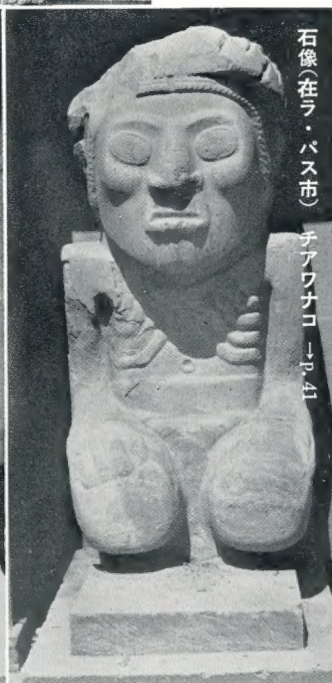
花崗岩一枚石浮彫り〈チャヴィン・デ・ワンタール〉

山岳文化　アンデス文明初期の中心は、北部山岳地帯のチャヴィン地方で、石彫をともなった、巨大な石造神殿、口の形に特徴のある土器はアンデス地帯全域におよび、地方的差異は勿論見出されるが、一貫したモチーフが流れている。山岳文化は一般にその影響力が広く各地におよぶ特徴をもっている。チャヴィン期の石造建築物は、特定の工人によって建設されたものではなく、一般の民衆が協同して彼等の神殿をつくったものらしく、石の大きさ、積み方には一定の方式がない。後の時代にくらべて粗雑である。石の彫刻、浮彫は一枚石彫りが多く、神像とおぼしいものの、モチーフは一定し、きばのある人面像と棍棒をもった人間像が目立った特徴である。

小石彫り〈不明〉

一枚石の門の浮彫り　チアワナコ →p.7

カラザザーヤの石段　チアワナコ

チアワナコ文化　次いで山岳地帯におこった文化は、チチカカ湖の南方を中心とするチアワナコ文化である。土器は美しく彩色され磨き上げられ、石工の技術はより精巧をきわめた。石彫および土器の模様のモチーフには独得なものがみとめられる。とくにプーマ（アメリカ豹）、コンドル（わしの一種）、蛇の組み合せがその特徴である。石の人間像も数多く発見されている。

右の石像背面

石像（在ラ・パス市）チアワナコ →p.41

石像（在ラ・パス市）チアワナコ

マチュ・ピチュの遺蹟．先つぼまりの矩形の入口，窓はインカ建築の特徴である →p. 14

クスコ，ムユマルカ城塞の礎石

インカの工人は精妙きわまる石積みを地上に残した。インカ晩期の石積みには、その石と石とのあいだに接着剤が使われていないが、完全に密着し、安全剃刀の刃をはさむ隙もない。石垣は力強い直線と奔放な不規則線を組合せて、全体として動的な印象をあたえる。また注意すべきことは、中期以降の石面にはほとんど風化の跡をとどめず、数百年後の今日、昨日出来上ったような新しさが保たれている。

海岸地帯につくられた山岳民族の城塞，コリッケの遺蹟

マチュ・ピチュの遺蹟（クスコ地方）

インカ　チアワナコ文化が荒廃する紀元千二百年ころ、とくに海岸各地に大都市が建設され、繁栄をきわめたとき、アンデス山中のクスコ付近に居をかまえた一部族があった。その族長の地位をインカと称し、初代のインカ夫婦は、チチカカ湖上の小島から、黄金の杖に導かれるままにクスコに来て、そこの住民に夫は農耕を教え、妻は糸つむぎと機織をつたえて繁栄の基をつくったと伝説は語っている。

クスコの石積み

マチュ・ピチュの遺蹟

太陽の神殿を望む．パチャカマ

太陽の神殿の壁．石積みの上に型に入れて作ったアドベが築かれている

これらの各地方の遺蹟には，古くはチャヴィンからインカまでの文化的堆積がみられる。例えばパチャカマの遺蹟についてみると，その太陽の神殿を築いているアドベ煉瓦は，古い，手でこねたふぞろいのものから，型に入れて作ったもの，インカ風の建物，明らかにインカの工人の建造になる石造物にいたるまで明確に分類することが出来る。しかも海岸は砂漠が多いので，遺物が見事に保存されている。

インカ時代に建設した月の神殿．建物の様式，窓，入口，石壁はインカ風である．パチャカマ →p. 14

チム帝国の首都チャンチャン

海岸文化　山岳文化に比較して海岸文化は地方的特徴が強く，泥の日乾煉瓦―アドベの建造物をのぞくと，普遍的なものは，山岳文化的なものである。海岸地方の文化の中心地としては，時代にもよるが，北からモチカ（後のチム帝国），チャンカイ（アンコンを含む），リーマ（パチャカマ，カハマルキニヤ），チンチャ，パラカス（ナスカ，チャンカ），カイホン・デ・ワイラスの六地方があげられる。

ランリの古墳群，チャンカイ

チャンチャンの浮彫り

トウモロコシの精〈モチカ〉

トウモロコシの精〈モチカ〉

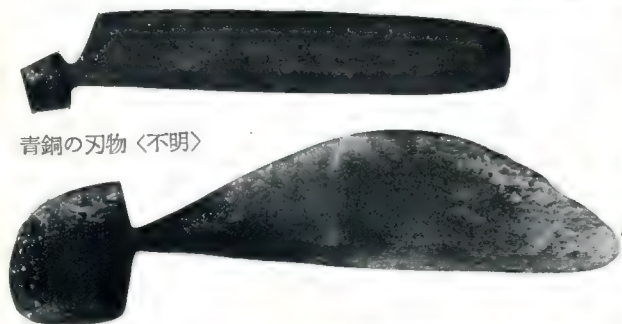
水ガメを背負う女〈パチャカマ〉

家屋の設計模型〈モ チ カ〉

前インカ時代の生活　いま土器の模様が写実的で、発掘品が豊富な関係上、主として都市形成期の北部および中央太平洋沿岸地帯の文化を偲んでみよう。農耕は相当発達し、トウモロコシ、インゲン豆、ソラ豆が盛んに栽培された。農耕儀礼が行われ、食器も木器か土器が使用され、サジも発見される。トウモロコシからつくったビールーチッチャが今日同様カメに貯えられ、木製か土器のコップで飲用されている。家屋の設計図は土をこねて作られ、雨が降らない地帯のために、屋根にはすき間があった。木工には青銅の刃物が使用され、女は子供やカメを背負って歩いていた。

石斧〈リーマ〉

木製サジ〈不明〉

青銅の刃物〈不明〉

青銅の工作具〈不明〉

チッチャを飲む男たち〈モチカ〉

木製コップ〈パチャカマ〉

魚〈モチカ〉

カニ〈モチカ〉

タコ〈モチカ〉

ヒョウタン舟〈チャンカイ〉

漁撈、狩猟　農業とあいまって、海岸地帯では漁撈と狩猟が、山岳地帯では狩猟が行われた。舟には二種類あったらしく、一つは葦をかたくたばねて作った草舟—バルサで現在も使用されている。一つは北海岸のヒョウタン舟で、ヒョウタンを数個結着したものらしいが現在は存在しない。漁法は銀製の釣針が広く使用され、漁網はタモ風のものが一般的であった。魚族は特に変ったものはないがタコが好まれていた。

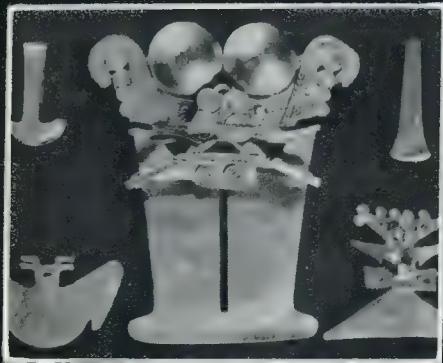
投槍器で槍を投げる〈モチカ〉

追込み式狩猟〈モチカ〉

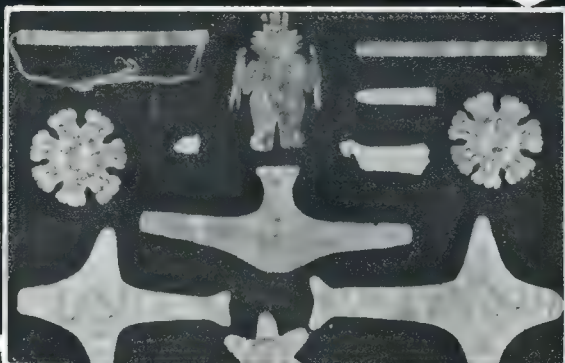
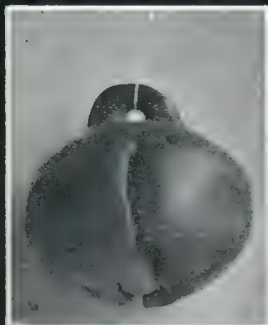
銀釣針〈チャンカイ〉

バルサに乗る漁師〈不明〉→p. 51

ヒョウタン舟〈モチカ〉

狩猟は集団的に行われたものらしく、勢子が獲物を追い出して、袋小路で投槍か棍棒で殺した。袋小路は天然の地形を利用するばかりでなく、獣路に障害物を設け、猟師が待ち伏せているところまで上手に誘導した。弓矢、石投げ、吹矢はほとんど使用されなかったが棍棒と投槍器がひろく普及していた。獲物の主なものは、野生のリャーマ、アルパカ、ビクンニャ等で、狩猟が食料獲得の重要な手段とは考えられない。

金細工〈コロンビヤ〉

金細工〈チャヴィン〉

金細工(毛ぬき)〈クスコ〉

金細工〈パラカス〉

銅合金(鈴)〈パチャカマ〉

銅合金(ナイフ)〈クスコ〉

冶金　アンデス地方では金銀銅とも実用的な金属で、僅かではあるが錫と水銀も使用されていた。これらの金属を土器に入れて、木炭の火に銅管で空気を吹きこんで溶融した。金銀の合金が最も一般的で、金銅、金銀銅の合金がこれについで使用された。後に軟鉄よりも硬い銅の製造にも成功している。

木製のキリ〈パチャカマ〉

骨製のキリ〈パチャカマ〉

土器の陰型〈チャンカイ〉

土器の陰型〈チャンカイ〉

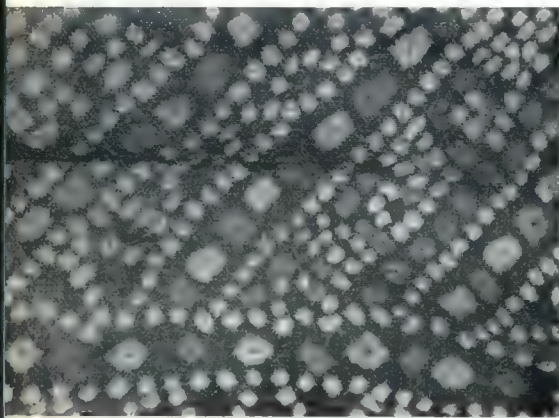
チャンカイのかま跡

土器　アンデス地方は良質の陶土に富み、土器の作製は早くから進歩した。はじめはてづくねで、紐状にのばした土を下からコイル状に積み上げて作ったが、工人が現れて大量生産の過程に移ってからは、陰型を使用するようになった。型の中で焼かれた土器は何回も磨き出しをかけその上に単色または数色をもって彩色し、蠟を引いて、再び入念に磨きをかける。このような技術は旧大陸のそれとは趣を異にする。

織物道具箱〈パチャカマ〉

織りかけの地ばた〈パチャカマ〉

紡織の技術は土器が現れる以前から存在し、棉は最も古い栽培植物の一つであった。紡錘車で棉またはリャーマ、アルパカの毛を糸にし、特殊の染料で染めてアヤ織りをしたり、白布を織って、しぼり染めを行う技術は女から女へと伝わり、インカ織りと称する精巧な織物を作りだした。技術の細部については今日詳かに出来ない点が多い。

糸まき〈パチャカマ及びビスコ〉

地ばたの構造

紡錘車を持つ女〈不明〉→P. 49

パラカスの発掘によって、豪華なインカ織りが世界に紹介されたが、最近中央海岸地方の織物が発掘されるにおよんで、さらに巧妙な技術が存在することが明かになった。しかも注目すべきことは、これらの見事な織物が、貴族のような上層部の者ばかりでなく、ひろく庶民のすみずみにまで普及していたことである。庶民の墓からも、伴葬品として美しい布が発掘されている。

布片〈チャンカイ〉

布片〈チャンカイ〉

布片(しぼりぞめ)〈チャンカイ〉

パンの笛を合奏する男〈モチカ〉

パンの笛を持つ男〈モチカ〉

パンの笛(葦製)〈イカ〉

コイル編みバスケット〈不明〉

かぎ煙草のチュウブ〈不明〉

アンデス地方の服装は地方的特徴のほかに、時代と階級により多少のちがいはみとめられるが、男は貫頭衣(ポンチョ)を着、スカートを腰にまき、女は一枚の衣をまとって、ベルトをしめ、肩にマントをかけるのが普通であった。このような服装はスペイン文化の影響によって大きく変化したが、いまでもその一部は西欧風の服装と混用されている。はきものはサンダルとシナ風の短靴が使用されていて、現在もそのまま伝えられている。職業による服装のちがいは軍人、僧侶、駅亭夫にいちじるしい。装飾品としては、首飾り、踝飾り、耳飾り、ネックレース、櫛等が愛用された。男も女も、肩にリャーマかアルパカの糸で編んだショルダー・バッグを掛けるのがならわしであった。

玩具〈アンコン〉

耳飾り〈不明〉

短靴〈イカ〉

櫛〈リマ〉

サンダル〈イカ〉

サンダルをはいた足〈不明〉

女性の服装(ツボの模様)〈クスコ〉

音楽は古い時代から好まれたものらしく、太鼓とタンブリンが発見される。粘土、葦、骨のフリュート、穀物の種子を入れたクラッパー、まっすぐな、若しくは曲ったトランペット、種々のパイプや笛、葦や粘土のパンの笛等がその後使用されるようになった。スペイン人とともに竪琴、ヴァイオリン、ギターが入って来て現在双方とも使用されている。

星状の棍棒頭(青銅製)〈クスコ〉

星状の棍棒頭(石製)〈クスコ〉

円形棍棒頭(石製)〈クスコ〉→p. 12

戦闘図. 棍棒, 投槍, 腰に青銅斧を下げている〈モチカ〉

棍棒をもつ戦士〈不明〉

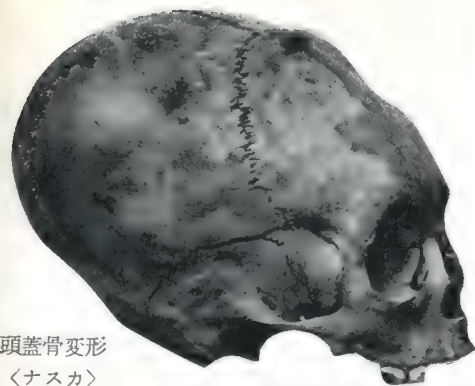
武器 インカがアンデス地方を征服しえたのは、武器の優秀さによるものではなく、むしろ軍事組織と戦術によるものである。武器としては一般に、投槍器、木製の投槍、石器から青銅器に漸次発達した戦闘用の棍棒、青銅製の斧が主なるもので、木製の楯も使用されたが、隣接地帯にひろく分布するボーラ(石投げ)や吹矢等はほとんど使用されていない。旧大陸にくらべると

戦闘図. 捕虜の扱いに注意〈モチカ〉

戦士〈不明〉

戦闘図〈モチカ〉

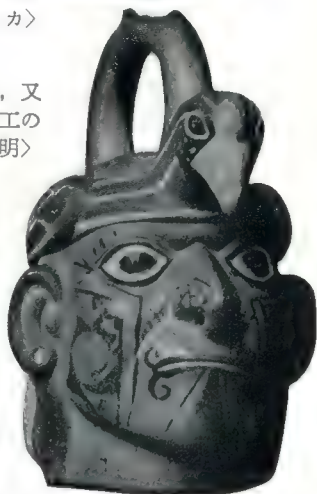
捕虜〈モチカ〉

インカの武器は貧弱である。アンデス地方における初期の戦闘は、ほとんど個人的戦闘であったが、インカは集団的な軍隊を編成し、集団的戦闘を行った。海岸地方の文化は決して山岳地方のそれに劣っていたわけではなかったが、戦闘の集団性に打ち負かされた。しかしインカの戦術は密林では有効でなかったのでアマゾンやチリー南部に進出できなかった。このことはインカ帝国の版図を太平洋岸に偏した砂漠と高原とに限定した。

頭蓋骨変形〈ナスカ〉

顔面塗色の男子〈モチカ〉

ミイラ〈パチャカマ〉

子供のカメ棺葬　〈イカ〉

顔面塗色，又は皮膚加工の男子〈不明〉

刺青、**皮膚加工**、**顔面塗色**が行われたばかりでなく、鼻中隔・耳・唇に孔をあけて、飾り物をさしこむ風習が広く普及していた。幼児期に頭を板で圧迫し、頭蓋骨を変形させることも一般的にみられる。死者崇拝は宗教の大部分を占め、インカ時代には、王や貴人のミイラをしばしば美しく着飾らせて陳列した。埋葬は蹲居の様式が多く、死体を布につつみ、種々の伴葬品とともに埋葬した。子供はしばしばカメ棺におさめられた。墳墓はあまり巨大なものはない。

チウルパの古[illegible]

[illegible]

チウルパの古墳 [illegible]

アドベの壁，古い教会，シャボテン，Viva El Perú（ペルー万才）．インカの上にスペインを重ねた町クスコ

スペインの侵入

紀元前二千五百年このかた、甚しく異質的な文化と接触することなく、独自の発達をとげたアンデス文明は、紀元千四百年頃アルチプラノに興ったインカ帝国の時代にいたって、らん熟の境に達した。アンデス地方の特徴ある社会組織のうえに強力な軍隊と交通網をつくりあげ、その版図を彼等と等質の文化の担い手の上に拡大し、完全に近い中央集権的政府を確立した。官僚制度も完備し、首都クスコよりのインカの命令や回答は村落のすみずみにまでおよんだ。征服者フランシスコ・ピサロは、スペインの豚飼人で、大発見時代の夢をいだいてパナマに渡り、遠征隊に加わって活躍した。その後インカ帝国の征服についてスペイン王室に進言し、きき入れられて一五三一年、三十七頭の馬、百八十三人の兵士とともに南アメリカの太平洋岸を南下し、サン・マテオ湾でインカに面会を申しこんだ。当時のインカ、アクワルパは山地の温泉にピサロを招いたが、彼は会見の場でやにわにインカを捕虜にした。極度に集中された権力者がいなくなったので一切の機能が停止した。インカは自分の入っている部屋に等しい金銀を与えるから釈放するようにと要求した。しかしピサロは後禍を恐れて絞殺し、反乱と内乱を鎮圧しつつ、インカの政治的宗教的組織を骨抜きにし、クスコから首都を海岸にあるリーマに移し、兵士によって荒されたクスコを再建した。だがそれはインカの上に俗悪なスペインを重ね上げたにすぎなかった。いまなおクスコはインディオの都である。

ペルー最古の教会

インディオ文化に反撥する町　ピサロは反乱を鎮圧すると、首都をクスコから海岸に移す決心をした。彼はパチャカマ都の北にある無人の原野にリーマ市を建設し、インディオの信仰の中心地、パチャカマを焼払った。リーマ市の古い建造物には、インディオの文化の影響は全然認められない。またかつてはこの町にインディオがはいって来ることさえ禁じられていた。植民地時代には代々ペルー副王府の所在地であった関係もあろうが、アンデス地方のスペイン文化の孤塁といった感が深い。

フランシスコ・ピサロの像

鉄門のある僧院

ペール市の旧中心地の中央に、プラッサ・ダ・アルマスという広場がある。広場の正面に教会、その左側に政庁、他の二面は商店街によって占められているが、写真でも明かなように商店街は影の深い廻廊にとりまかれている。広場をめぐってピサロの銅像、古めかしいスペイン風の建物が残っている。

廻廊のある商店街

ブラジル・ボリビヤ国境の
プェルト・スアーレス飛行場

[illegible]ンタ・クルースにみるスペインの古[illegible]

[illegible]の待合室で

東コルディレラ山系の東低地―オリエンテ・ボリビヤーノには、ラ・プラタ川をさかのぼって来たスペイン人のふるい植民地が点在している。これらの植民地をかこむ密林地帯には、グアラニー語を話すインディオが現在なお半裸の生活を続けている。四百年のあいだ彼等は孤立した生活を営んで来た。

[illegible]

この地帯はインカ文明の影響をほとんどうけなかったところで、いわば未開の地域であった。しかし最近豊富な油田が、あちこちに発見されはじめたので、アメリカ合衆国はポイント・フォアの要員を送りこんで、道路の開設を計画しているし、ブラジルもアルゼンチンも鉄道を敷設しつつある。日本人の移民も一九五四年以来入植しはじめた。将来の地域である(二一三頁参照)。

サンタ・クルースの民家。廻廊とギリシア風の柱に注意

クルセニヤ

クルセニヤ（サンタ・クルースの女）

牛車．わだちも板でできている

市街地中央公園の銅像

魚釣をするスペイン系の子供

オリエンテ・ボリビアーノの最大の町サンタ・クルースは一五六〇年、ラ・プラタ川をさかのぼって来たスペイン人によって建設された。家のつくりも、女たちの衣服も、祭儀も中世スペイン風である。教会に面した公園には、町出身の勇将の銅像があって、あつい夜、住民の大部分はここで時間をすごす。

インディオに同化するヨーロッパ　アンデス地方の海岸にスペイン人が建設した典型的な町がリーマ市であるとするならば、山岳地帯のそれはボリビヤのラ・パス市である。ラ・パス市の標高は飛行場が海抜四千八十五米、実際の町は、その下の傾斜面にある。この地方は一時ペルー副王の治下にあって、アルト・ペルーともいわれた。インディオの人口が稠密で、町の住民の大部分がアイマラ族である。女たちは今日もなお、山高帽のような帽子をかぶり、袴をはき、色鮮かな布を肩にしている。

寺院のインディオ風彫刻
→p. 13

ラ・パス市最古の教会サン・フランシスコの建物には、写真でみるようにインディオ風の彫刻がほどこされている。町の建築物も、目ぬきの通りにはスペイン風、アメリカ風のものも認められるが、一歩裏町にはいるとアドベのインディオ的なものが多い。言語もスペイン語のほかにアイマラ語が通ずる。

正面にインカ時代、右側にインカ以後の石積み、その上にスペイン風のバルコンのある家

クスコ　インカ帝国の首都クスコは、スペイン侵入当初、兵士たちが金銀を求めてひどく破壊した。ピサロは復興に力を注いだが、それはちぐはぐな復興であった。インカの石塁の上に教会を建てたり、スペイン風の建築を行った。また煉瓦で新しいスペイン風の住宅や、商店をたてた。一九四二年、この地を襲った地震によって、インカの石塁の上に建てられたスペイン建築は崩れたが、石塁はそのままであった。

1942年の地震でもインカの石塁は崩れなかった

スペイン風の街

町の中央市場に立つインカの始祖マンコ・カパクの像

インカが亡んで、ピサロが首都をリマに移転すると、クスコの人口は激減した。しかし十八世紀まで、この町は反乱の中心であった。スペイン以前においても、山岳民族と海岸民族との対立ははげしかったが、今日では山岳文化はインディオのそれを、海岸文化はスペイン文化を表徴するようになった。

インカの石塁の上に住居が建てられている

あきない　ケチュア族もアイマラ族も、男子が商業に従事する場合はまれである。ラ・パス市やリーマ市の公設市場でも、定期的にひらかれる小さな町の野天の市場でも、売手は女で買手は男が多い。また街頭の食物屋も女の仕事である。市場日の前日には、貨物自動車が、村々をまわって歩く。市に行く女は荷物を担って乗車する。弁当は持たない。交通費と食費を払うと、彼女らが家に持ちかえる金は僅かである。

アイマラ族の食物屋

ケチュア族の女. 頭髪の編みかたに注意(既婚者)

アイマラ族とケチュア族とは、言語で区別することが出来る。そのほか女の服装が特徴的である。山高帽がアイマラ族、白いシルクハットがケチュア族で、シルクハットの紐の形で出身地が明かにされている。ケチュア語はスペイン人の政策によって広く普及され、アイマラ語以外の言語は消え去った。

[illegible]はこのように[illegible]背負う。アイマラ族

アシェンダには、地主の家—カサ・グランデを中心に、ピオン(労働者)の貧しい家がならんでいる。アドベの家で床がない。そのほかトウモロコシからつくるビールーチッチャを売る店が付属している場合が多い。アシェンダは独立した王国で、司法権にちかいものをもち、ピオンは半農奴的存在である。

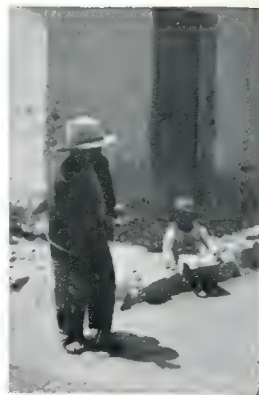
村の居酒屋．チッチャありますの白旗が出ている

アシェンダのピオンの家

地主の家．カサ・グランデ

アルチプラノの農村

アルチプラノの農村　アルチプラノには雑草がすくない。作物は水さえあれば、すくすくとのびる。耕地はアドベの塀を持っている場合が多い。家屋は余り散在せず、所謂プエブロ(村落)を構成している。プエブロには郡長の任命によるコレヒドール(村長)がいる。プエブロには課税権があって、通過する車輌の交通税をとるところもある。雨が少いのと、家の中が暗くて寒いので、畑仕事のないときには、日が暮れるまで男も女も子供もプエブロの道路に出て、遊んだり、仕事をしたりする。

墓地

コマ遊び

女の大切な仕事は、紡錘車をまわして棉や獣毛から糸をつむぎ、その糸で布を織ることで、その技術はインカやそれ以前とすこしも変らない。プエブロの片隅には墓場がある。アドベで築いた墓は、チウルパの遺跡の形式に似ている。ただちがっているのは、十字架がその背後に立っているだけである。

リャーマ

動物　スペイン人以前のアメリカ大陸には牛、馬のような大家畜も、羊や山羊、豚のような小家畜も存在しなかった。犬はインディオの各部族によって飼育されていたが、それはアメリカの原産種ではなく、おそらく新石器時代のはじまりにアジヤから移動したインディオの祖先がつれて来たものらしい。ただアンデス地方にはこの地方原産の家畜が発見される。ラクダ科の一種であるリヤーマとアルパカがそれである。

毛ののびた山羊

毛ののびたロバ

アルチプラノから見たコルディレラ山脈

チチカカ湖のバルサ（草舟）→p. 21

スペイン人は、アンデス地方に牛、驢馬、豚、羊等を持って来た。馬もともなって来たが四千米の高原にはうまく適応できなかった。そのなかで驢馬と豚には大きな変化がおこった。夏毛と冬毛とが交代しなくなったために、被毛が長くて多くなった。もっともアルチプラノでは犬も牛も羊も毛が長い。

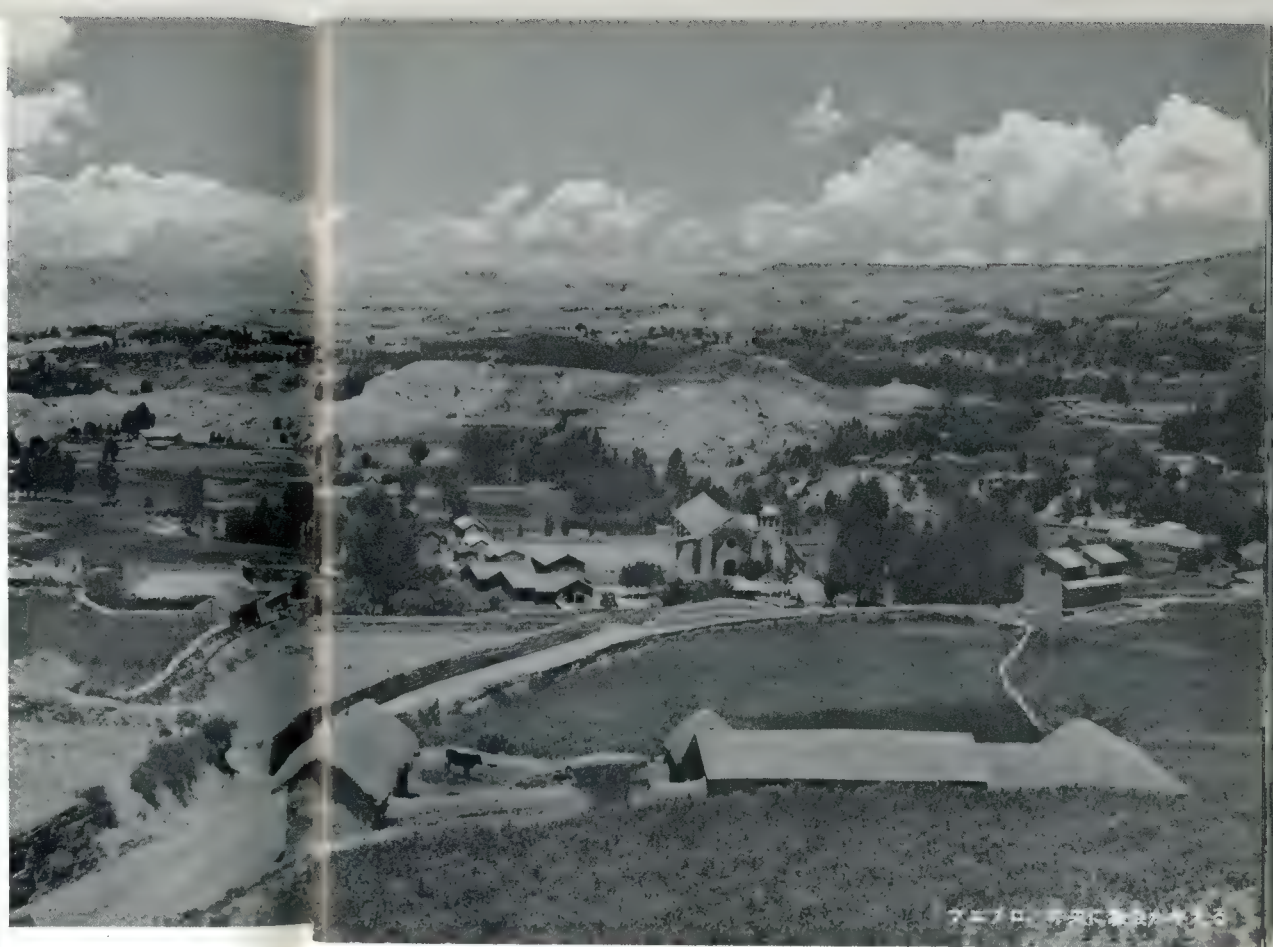
シャボテン、実を食用に供する

アンデスの栽培植物　旧大陸の文化と新大陸のそれとがいちじるしく異る点は、栽培植物によく現われている。最も特徴のあるものは次のとおりである。

種子穀物　トウモロコシ、キノア(Chenopodium quinoa)アマランス(Amaranths sp.)。

豆類　インゲン豆、紅花インゲン、白インゲン、ソラマメ。

果実類　パインアップル、ペピーノ(キウリの一種)、シャボテンの実。

根菜類　ジャガイモ、サツマイモ、タピオカ、ラノカセイ、オカ芋。

その他　南瓜、チリー辛子、タバコ、ココア、コカ、ヒョウタン。

アンデス農業のひとつの特徴は灌漑設備の発達で、簡単な測量機により千分の一の傾斜を測りだし、縦横に水路をめぐらしている。一方農具は非常に簡単で、スペイン人が来るまで鋤も鍬も知らず、僅かに木の棒、または青銅の尖端をつけた棒のみを使用していた。

砂漠の灌漑—水路の両側に綿が育っている →p. 8

ボリビア　サン・ホセの錫山

ラ・パス市の□同盟につめかける労働者

鉱業　アンデスの山岳地帯は金属資源が豊富で、インカ以前から金銀はもちろん、錫や銅の採掘が行われて来た。スペイン人は侵入すると、ただちにインディオを奴隷として使役し、金銀のうちでもとくに大量の銀を採掘し、ヨーロッパに送った。独立後、ボリビヤとペルーでは、漸次おこって来た少数の資本家によって、国内鉱山の大部分は専有され、生産物は世界の市場に売却された。鉱産物を売って、外国から生活必需品を購入していたために、アンデス地帯には最近にいたるまで、近代産業らしい産業はおこらなかった。

鉱山労働者の九十九%までがインディオで、ピスコという甘蔗からとった蒸溜酒に酔い、荒れはてた性生活がその日暮しの彼等の生活を支配してきた。ボリビヤ政府は一九五二年に私有の大鉱山を国有化したが、打ちつづく錫の価格の下落と、鉱山自身の老朽化のためにその経営は困難をきわめている。

サン・ホセ鉱山の新しい労働者住宅

サン・ホセ鉱山の選鉱所

坑外で働く婦人労働者

国営鉱山　ボリビヤでは、国営鉱山の運営を円滑にするために「ボリビヤ鉱山協同組合」を設立し、アメリカ合衆国の技師団を招いて各鉱山の徹底的な調査を行った。その結果、老朽のために閉鎖を勧告されたもの、人員の整理、機械化を勧告されたものが続出した。しかしこのような措置を急速にとる場合には、多数の失業者を出すことになるために、転業事業の進捗と相まって漸進的整理を余儀なくされている。一方労働者の生活水準を改善するために、住宅の改善、生活必需品の低価格による配給を行って明日の準備をしている。

アンデス地方の鉱山では、女性と神父が坑内に入ることが禁忌(タブー)となっている。地下神はジアポロと称する鬼の顔をした神で、労働者は毎日コカを噛んだ唾液をささげ、毎年八月一日にはリャーマと鶏の肉を供犠する。このような慣習は全労働者の三分の一を占める鉱山生れのものによって受継がれてゆく。

都市へ流入する労働者

[illegible]美しい土器をつく[illegible]
[illegible]近代[illegible]

工業　おくればせながら、アンデス地方にも工業がおこりはじめた。それは第二次世界大戦直前からのことであって、戦争中に飛躍的発展をとげたとはいえ、ペルーでもボリビヤでもその規模は小さく、もちろん軽工業にとどまっている。しかし多くの工場は戦後に思い切った改造が行われているために、設備は非常に近代的で、機械類や原料もヨーロッパ、アメリカ、アジヤ(日本)の最良のものが購入され使用されている。旧式な鉱山設備とは対照的である。

[illegible]工場地[illegible]

石油の配給を受ける労働者家族

工業がおこって来てから、アンデス地方の社会は変貌しつつある。いままでアシェンダと鉱山にしばりつけられていた人口が、都市に集中しはじめて、都市人口は膨張し、近代都市にインディオの文化が新しくもたらされ、スラム街が形成されつつある。インディオによる労働運動も活発になって来た。

アルチプラノのある駅．気圧が低いためディーゼル機関車が使用される．屋根の上にも座席がある

アレキッパ(ペルー)の飛行場

交通　インカ時代には全国の都市をつなぐ石造道路が建設され、駅亭が設けられた。彼等は車を知らなかったので人間がかついだり、リャーマにつんだりして運んだ。このような輸送方法は現在も広く行われている。また鉄道は太平洋岸から山岳地帯へ、山岳地帯からアルチプラノを縦断して大西洋岸へ向うものがある。鉄道の大部分は英国又は合衆国の資本によるものであるが、近年、ほぼ償還を終ろうとしている。

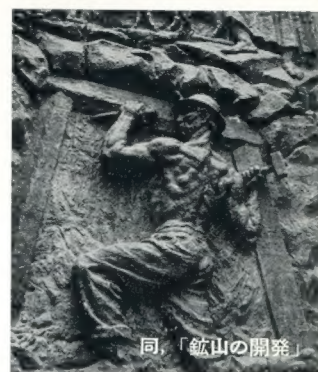
大陸縦断鉄道．ラ・パス市からヴエノス・アイレス市へ

リヤーマと徒歩による交通

近代的な交通機関としては、飛行機の発達がいちじるしい。アンデス地方の航空路は、アメリカ合衆国の資本によるブラニフおよびパナグラによって支配され、国内資本による航空路は地方路線に限られている。自動車道路はアメリカの借款によるパン・アメリカン・ハイウェイの計画がすすみつつある。

ペルー大蔵省玄関の浮彫，「ペルーの歴史，インディオ」

ペルー大蔵省正面の壁画，「自然と戦うペルー人民」アキリアード画

インディヘニスモ　メキシコの芸術界にあらわれたインディヘニスモ—インディオ主義運動は、従来見おとされていたインディオ文化の、美の世界における再認識を意味する。ラテン・アメリカの進歩的運動の震源地はメキシコにある。メキシコで起ったことは何時の日かラテン・アメリカ全域にひろがってゆく。ナショナリズム運動も農地改革もメキシコで点ぜられた焔であった。いまインディヘニスモ運動は、ラテン・アメリカ諸国、特にインディオの人口が占める比重の高い国々にひろまりつつある。ペルーやボリビヤにおいては絵画と彫刻にインディオ文化のルネッサンスをうかがうことが出来る。

同，「鉱山の開発」

岩波写真文庫目録

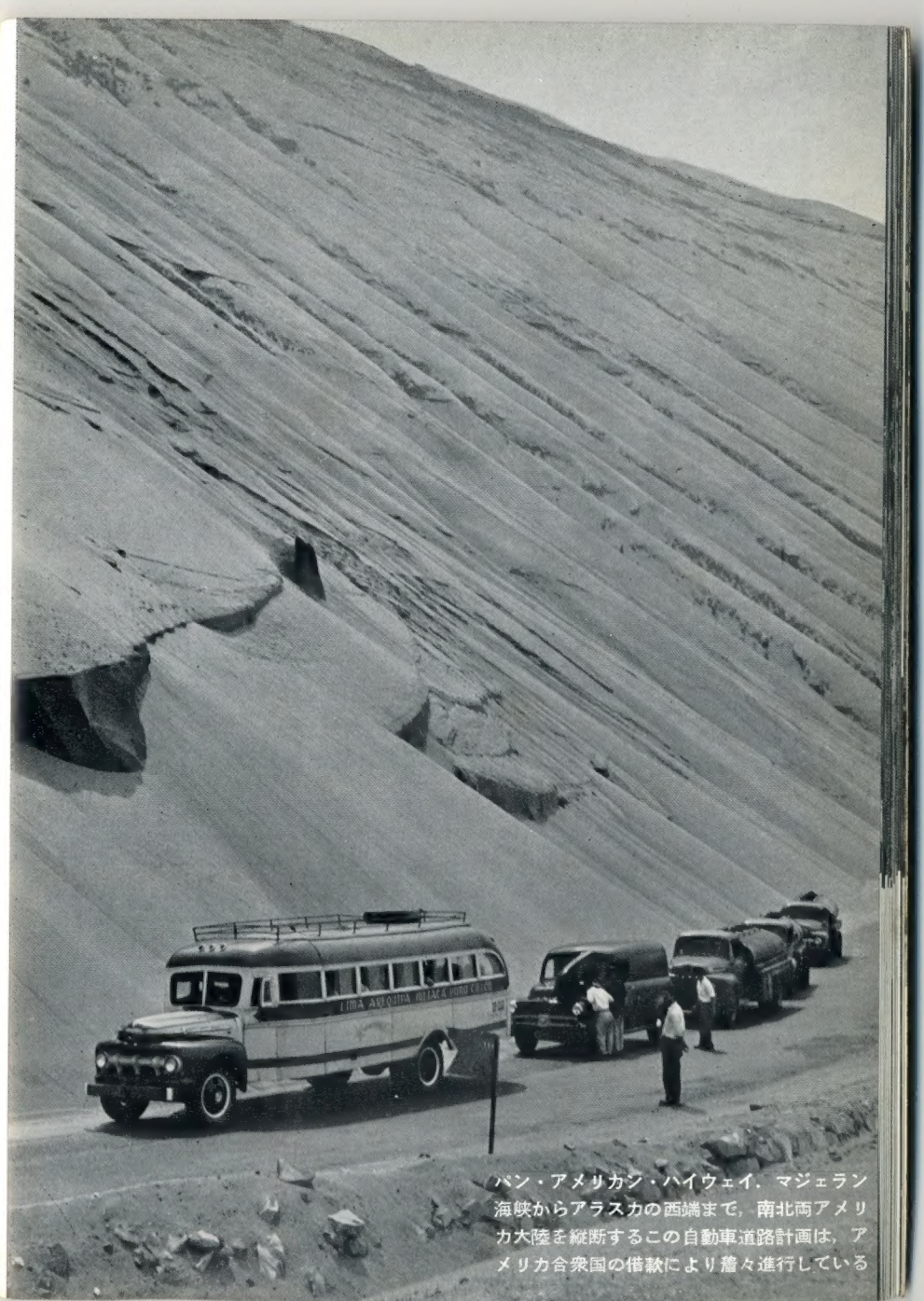
1 *木綿
2 昆虫
3 *南氷洋の捕鯨
4 *魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10 *紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19 *川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 仏像
43 *化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47 *東京—大都会の顔—
48 *馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54 *水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57 *石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65 *ソヴェト連邦
66 能
67 *造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90 *電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94 *自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97 *システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105 *宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126 *貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132 *日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道(東・北部)
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道(中央部)
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷 -潮来-
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府

新刊

262

北アルプスの山々
263

地形の話
264

*印は品切でございます

パン・アメリカン・ハイウェイ．マジェラン海峡からアラスカの西端まで，南北両アメリカ大陸を縦断するこの自動車道路計画は，アメリカ合衆国の借款により着々進行している

日曜の午後，村の教会に集まるアイマラ族の女

¥ 100